



No.2

2021年12月10日

Newsletter

日本遺伝性腫瘍学会 / The Japanese Society for Hereditary Tumors

目次

開催報告

- 第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会報告 n1
- 第23回遺伝性腫瘍セミナー開催報告 n2

お知らせ

- 第24回遺伝性腫瘍セミナー n3
- 第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会 n3
- 編集後記 n3

開催報告

◆第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会開催報告

学術集会を終えて

会長 赤木 究

埼玉県立がんセンター 腫瘍診断・予防科

新型コロナウイルス感染拡大のなか、2021年6月18、19日に第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会を、完全Web配信（ライブ+オンデマンド配信）で開催させていただきました。直前まで開催方式が決まらず、参加者の皆様には大変ご迷惑をおかけしましたが、最終的には1,370名と過去最高の参加登録をいただき、盛会裏に終わることができました。Web配信であるがゆえに、それを肌で感じるができなかったことは残念ですが、参加していただきました皆様、そして学術集会の準備や運営にご尽力いただきました方々に心より感謝申し上げます。

今回の学術集会では、「がんゲノム医療と遺伝医療～ボーダレス化のなかで躍動する～」をテーマにプログラムを準備しましたが、ボーダレス化してしまったがゆえに、再度、「自分の守備範囲をどこまで広げる必要があるのか、それに適応できるのか、どこまでのことが求められているのか、それ以外の部分は誰がカバーするのか、適材適所の布陣になっているのか」など、解決していかなければならない問題が多く存在することも改めて認識させられました。こうしたパラダイムシフトが起こっているときだからこそ、大胆な変革に私たちも挑戦していかなければならないとも感じました。

「ゲノム情報」というように、ゲノムは「情報」として扱うことができます。いまや社会全体がGAFA〔グーグル（Google）、アマゾン（Amazon）、フェイスブック（Facebook）、アップル（Apple）の4社の総称〕と呼ばれる巨大IT企業の影響を大きく受けるような状況にあり、ゲノム情報も私たちが想像しているよりもはるかに速いスピードで、医療のみならずさまざまな分野に大きな影響を及ぼしながら広がっていくものと思われれます。そうした意味では、もう一段高いところからゲノム情報を俯瞰していくことが求められているように思います。少し話が大きくなりましたが、こうした大きな波に飲み込まれても、がんゲノム医療に従事する一人として本質を見失うことなく進めていけたらと、学術集会を振り返って思う今日この頃です。

学術集会を終えて

会長 向原 徹

国立がん研究センター東病院 腫瘍内科 / 遺伝子診療部門

埼玉県立がんセンターの赤木究先生とともに、第27回日本遺伝性腫瘍学会学術集会の会長を務めさせていただきました、国立がん研究センター東病院の向原徹です。

おかげさまでもちまして、本学術集会は過去最高の参加者数をいただく盛会となりました。まず、ご発表、ご参加いただいた方々に感謝申し上げます。また、学術集会の運営を担って下さった方々、共催企業の方々にも感謝申し上げます。

本学術集会では、「がんゲノム医療と遺伝医療～ボーダレス化のなかで躍動する～」というテーマを掲げました。近年のゲノム解析の臨床応用、また、遺伝性腫瘍にとくに有効性を示す抗悪性腫瘍薬の登場などにより、遺伝性腫瘍は専門病院でまれに遭遇する存在ではなく、日常の臨床現場で日々対応すべき存在となりました。おのずと、遺伝専門医とがん治療医が車の両輪のごとく協働するとともに、カウンセラー、看護師、薬剤師、臨床心理士、ソーシャルワーカー、ペイシェント・アドボケートなど、多職種によるチーム医療が求められる時代となりました。本学術集会にも、さまざまな職種の方にご登壇、ご参加いただき、新しい時代の新しい学術集会を開催できたとたいへんうれしく思っております。とくに、私の意向を強く反映させていただいたシンポジウム「がんゲノム医療の今と未来」は、各分野のエキスパートによる素晴らしいご講演のお陰で、文字どおり今日の課題と未来への道筋を示すものとなり、強く印象に残りました。

ただ一つ、コロナ渦にあって皆さまと直接お目にかかれなかったことはたいへん残念ではありましたが。来年の岡山での学術集会こそは対面で議論ができることを切に願っております。

学術集会の準備においては、赤木先生にお任せするばかりで「両輪のごとく」働くことはできませんでしたが、このような貴重な機会をいただきました赤木先生はじめ理事会の先生方に、末筆ながら感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

◆第23回遺伝性腫瘍セミナー開催報告

■テーマ：リー・フラウメニ症候群を中心に

■実行委員長：吉田 輝彦 先生（国立がん研究センター中央病院）

プログラム委員長：田村 智英子 先生（FMC 東京クリニック）

服部 浩佳 先生（名古屋医療センター）

■日程：2021年1月19日（火）～3月31日（水） Web 配信

2020年度第23回遺伝性腫瘍セミナーを開催して

プログラム委員長：服部 浩佳

国立病院機構名古屋医療センター 遺伝診療科

第23回遺伝性腫瘍セミナーのプログラム委員長をお引き受けたのは、2020年の1月でした。当初は夏の高知を楽しみにしていましたが、その後の急激なCOVID-19の感染拡大状況の変化のため、4月にはオンライン開催となりました。ロールプレイをどうするかが懸案でしたが、吉田輝彦先生、田村智英子先生、中島健先生とZoomでのロールプレイを試し、これならいけるという感触を得たのが5月でした。手探りかつギリギリの状態準備を進め、振り返ってみるとよくできたなというのが実感でもあります。ご参加の皆様には、予定より開催が遅れましたことをお詫びいたします。

参加者の声

第23回遺伝性腫瘍セミナーに参加して

大田 健太郎

独立行政法人国立病院機構新潟病院 脳神経内科

第23回遺伝性腫瘍セミナーは2021年1月19日から2カ月にわたって行われ、その中でロールプレイング研修（RP）が2日にわたって行われました。

私はこのセミナーで、リー・フラウメニ症候群について大きな学びを得ました。今回からWeb開催となったことで、何度も聴講して内容を確認することができました。とくに、田村和朗先生の「遺伝医学総論」で取り上げられた、常染色体優性疾患の再発率を算出して計算したところは、私にとってエポックメイキングでした。再発率計算を正確に迅速に行うことで、今後、当院の遺伝カウンセリングを発展させることができるのではと考えました。

遺伝性腫瘍はエビデンスに基づいたリスク評価のうえ、適切な情報提供を行うことで対象者のインフォームド・チョイスを促し、「救える命」を救うことが重要です。今回のRPでは小児例と成人例の両方が設定されており、疾患自体の情報提供に加えてサーベイランスの説明の仕方についても幅広く学ぶ機会となりました。ただ、オンライン形式であったため、表情以外の非言語的コミュニケーションが充分であったかが不明でした。私は今年臨床遺伝専門医受験を予定しており、私自身の知識とモチベーションを大きく向上できました。このような機会を与えて下さった貴学会に感謝を申し上げます。

セミナーに参加してみたら想像以上に得たものが多かった

川上 賢太郎

恵佑会札幌病院 腫瘍内科

ロールプレイの形式は、検討の結果、参加者3人に対しファシリテータ1人と少人数かつ短時間（全体60～90分、1人当たり演習時間12～13分）となりましたが、事後アンケートでは多くの方に「ちょうどよかった」という感想をいただき、コンパクトなロールプレイにも得るところがあったようで、プログラム委員長として安堵した記憶があります。

ファシリテータの方との事後ミーティングでわかったことは、オンラインロールプレイではよりファシリテータの役割が大きかったという事実でした。独自の資料を作成いただいたファシリテータの方がおられましたし、受講者からもファシリテータを評価する声が多くありました。参加者の満足度が大きかった反面、ファシリテータの創意工夫に依存した部分が多く、主催者として内容の均てん化が必要であることを学びました。

プログラムの1つにLi-Fraumeni Syndrome Association (LFS)の代表であるJennifer Perryさんからビデオメッセージをいただきました。田村智英子先生はJenniferさんと旧知の仲ですが、私も打ち合わせのZoom meetingでゆっくと話すことができました。コロナ禍が落ち着いた暁にはLFSとの交流を深め、日本での患者会設立のきっかけになればと望む次第です。

最後に、実行委員長の吉田輝彦先生をはじめ、関係各所の先生方、ファシリテータの先生方、そして参加者の皆様への感謝を表し、感想といたします。

私は卒後15年目の腫瘍内科医で、2019年に日本遺伝性腫瘍学会に入会しました。遺伝性腫瘍の初学者として危機感をもって自己研鑽を図っていますが、当院は小児科や骨軟部腫瘍科が存在しないため、リー・フラウメニ症候群（以下、LFS）の診療経験を積み難く、どうしたものかと悩んでいました。そんな矢先に、LFSを学べる本セミナーの案内メールが届きましたので即日申し込みしました。

本セミナーの感想ですが、25個の講義を繰り返し視聴できることが非常にありがたかったです。オンラインセミナーでは見逃し配信をカバーすると参加料が高騰すると聞いていますが、たくさんの秀逸な講義とロールプレイで2万5,000円はお釣りがくると思いました。LFSの診療経験が全くないからこそ申し込んだロールプレイでは、ファシリテータの田辺先生、小林先生と大田先生というメンバーに恵まれて、予定時間を超過して学ぶことができました。よく練られた症例が3つもあり、事前ディスカッションを視聴してからロールプレイに臨みましたが、さらにフェアな振り返りと考察ができるプロセスは、短時間で効率的に診療経験を得られたと実感しました。

月並みですが、本セミナーに参加して良かったと実感しています。最後に、私たちのロールプレイをオーガナイズしていただいた田辺先生、セミナー実行委員のみなさま方にお礼を申し上げます。

遺伝性腫瘍セミナーに参加して

鈴木 美慧

聖路加国際大学 / 聖路加国際病院 遺伝診療センター

新型コロナウイルス感染症の拡大により、当院でも臨床研究としてオンラインでの面談方法を検討してきました。実際に看護学生を対象としたオンラインでの模擬遺伝カウンセリングでは「講義を聞いているような印象だった」（深野、遺伝カウンセリング学会報告、2021）との評価があり、

こうしたオンラインでの面談をいかに対面での遺伝カウンセリングの雰囲気に近い方法で提供するか、本セミナーのロールプレイでも同様の課題を感じました。

疾患の話をする際には、1つのフレーズごとの情報量をより少なくすることや相手の理解度の確認を細やかにするなど工夫しました。また、ノンバーバルなコミュニケーションとして、画面に映る身体の部分が限られることや通信のタイムラグが起こることを踏まえ、対面よりもオーバー気味のリアクションや間合いを取ることを、カメラとの距離を少し長めに取ることなどで視線がふれずに相手とのアイコンタクトが取りやすくなるなどの気づきがありました。オンラインでも面談における基本的な態度、スキルの獲得は何よりも重要であり、さらに、状況に応じた応用力を身に付けていくことが必要であることを再認識した経験でした。

多くの学びが得られた Web セミナー

松谷 奈央

独立行政法人国立病院機構九州がんセンター がんゲノム遺伝医療部

「遺伝のことを全く知らずに看護していたんだ・・・」私が初めてセミナーに参加させていただいたのが2008年、がん看護専門看護師の大学院

に通っている時でした。本人だけではなくご家族の予防に繋がれるとは、がんセンターで働いていた私にとっては大変衝撃であり、同時に多くの遺伝性腫瘍の方を見送ってきたことも知りました。あれから13年経ち、遺伝医療も大きく変化したと感じます。

私は今回のテーマであるリー・フラウメニ症候群に関して知識や経験が少なく、対応に難渋することもありましたので、セミナーで最新の情報を得ることができ、たいへん有意義な時間でした。小児期での遺伝学的検査やサーベイランスなど、難しい問題が多く残されていることも改めて痛感しました。また、Zoomを通してのロールプレイングは初の試みで、いつも以上に緊張しました。説明する際の資料の提示やクライアントの表情を読み取ることは対面より難しいと感じましたが、少人数で十分な時間をかけてカウンセリングや意見交換を行うことができました。例年は他施設の方と直接コミュニケーションを取ることが楽しみでしたが、Web上でも得られるものがたくさんあることを実感しました。

今後も、看護師として、また遺伝性腫瘍コーディネーターとして、患者さんやご家族に寄り添った支援をしていきたいと考えています。最後になりましたが、セミナーを企画くださった先生方・スタッフの皆様にご心より感謝申し上げます。

お知らせ

第24回遺伝性腫瘍セミナー

- テーマ：遺伝性消化器がん（FAP、リンチ症候群を中心に）
- 講義：2021年11月12日（金）午後～14日（日）正午
- 事後オンデマンド配信：2021年11月22日（月）～1月30日（日）正午
- ロールプレイ実施日程：2021年11月27日（土）、28日（日）
- プログラム委員長：中島 健 先生（京都大学大学院医学研究科 医療倫理学・遺伝医療学）
隈元 謙介 先生（香川大学医学部消化器外科学）

第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会

- 日 時：2022年6月17日（金）～18日（土）
- テーマ：遺伝性腫瘍のルネサンス ー 追いつける夢ー
- 場 所：岡山コンベンションセンター
- 会 長：藤原 俊義 先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 消化器外科学）
田中屋 宏爾 先生（岩国医療センター 外科）

編集後記

ご多忙の中、今回ご寄稿いただきました先生方に深謝申し上げます「ありがとうございます!!!」。前回のニュースレター発行からお時間をいただいていたのですが、日本遺伝性腫瘍学会の第2号ニュースレターとなります。COVID-19の影響の中で、前回2月のニュースレター第1号発行以降に開催された遺伝性腫瘍学会主催の学術集会・セミナーともに充実したものであったと、参加した立場からは感じておりますが、皆様はいかがでしたでしょうか。10月末現在、全国的にCOVID-19感染者数は減少しているようです。COVID-19が

なくなることはないのかなと思いつつ、このまま日常生活への影響が小さくなってくれることを願うばかりです（今年の年末は、県外に移動できればなぁと期待するばかりです）。

臨床ではリキッドバイオプシーが保険収載され、忙しさも増すばかりと思いますが、読者の皆さまにおかれましてはご自愛くださいませ。次回の編集後記はCOVID-19ネタではないものが書けるとよいなぁと、思いつつ、次回もよろしくお願いいたします。

（金子景香、田辺記子）